

「水土を守る人々」では、農業や農業用水の役割とこれらが持つ多面的機能等が十全に発揮されていくために、農業水利施設等の維持管理を支える人々の日常にスポットを当てて、その取り組みを紹介することで、農業農村整備や多面的機能の発揮が「人」の支えの上に成り立っていることを伝えていきます。

「濃尾平野を潤す農業用水を送り続けています」

～東海農政局木曽川水系土地改良調査管理事務所犬山頭首工管理所
機械電気係長 川野俊久 氏～ 愛知県

1 9,300haの農地を潤す頭首工の管理 ～現代の「^{いりもり}杓守」～

今回「水土を守る人々」で紹介するのは、愛知県西部に広がる濃尾平野という広大な沃野約9,300haに農業用水を供給するため、一級河川木曽川に岐阜県各務原市と愛知県犬山市をまたいで設置されている「犬山頭首工」、その管理所で機械電気係長を務めている川野俊久さんだ。



川野係長（入省15年目）

犬山頭首工は、この地域の農地を四百年來にわたり潤し続ける3つの農業用水（宮田用水、木津用水、羽島用水）の取水口を1箇所合口するため、今から約50年前に国営事業により造成された施設で、農林水産省が直轄管理を行っている全国でも珍しい頭首工である。

濃尾平野は、徳川の時代に造られた「御^{おか}囲^こ堤^{つつみ}」によって木曽川の洪水から守られているとともに、「杓^{いり}（取水口）」によって用水が確保され、日本有数の沃野となった。「杓」によって確保された用水は「杓守」によって管理され、濃尾平野を潤し続けてきた。犬山頭首工を管理する職員は、言わば現代の「杓守」である。

2 取水管理における苦労

頭首工の管理は24時間365日気が休まることがない。各土地改良区からの要望配水量を確実に取水し、かつ1秒たりとも水利権を超過した取水とならないよう、河川水位と各ゲートの開度に常に気を配る。田んぼの中干し後には水利権ギリギリまで水を配分することがあるため、特に気を使うことが多いそうだ。そして、管理する上で最も大変なのは洪水時である。犬山頭首工は暴れ川とも呼ばれる木曽川の下流部にあり、計画洪水量は12,500m³/sにも及ぶ。少しのミスで用水路が溢水したり、下流での事故を誘発してしまうのだ。特に近年は、ゲリラ豪雨と呼ばれるような突発



毎日24時間体制で取水管理

的な降雨も多く、取水操作に影響を与えるような河川水位の変動が度々あるというが、その対処方法はマニュアル通りにはいかず、日々の経験が毎日の安定的な取水を支えている。

3 施設の管理に携わって

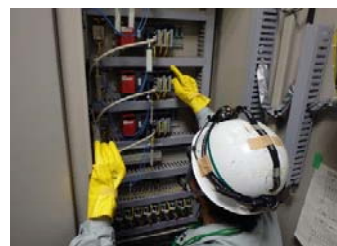
大きな洪水があると取水ゲートの前の除塵機には大量の塵芥が溜まり機械が停止してしまうため、人の手で取り除かなくてはならない。ただ、このような緊急時の作業を管



塵芥処理は用水安定供給に不可欠

理所の職員全員で行い、チームワークにより無事に用水路へ水を送り続けることができた時は、格別な達成感を感じると話してくれた。

通常、土地改良施設の管理は土地改良区の方々に委託することが多く、国の職員が直接施設の管理に携わることは少ないため、維持管理事業はマイナーな職場というイメージもあるが、少ない予算の中でいろいろな工夫をしながら課題を処理していくことが川野さんは楽しいという。また、頭首工周辺は昔から雷の通り道と言われており、地域特有のトラブルとして落雷による計器故障があるが、そういった場合に自ら点検や修理ができるよう、現在、電気工事士の資格を取るための勉強をしているそうだ。



管理機器を点検する川野さん

4 終わりに

犬山頭首工での管理の経験を活かし、「今後は、施設を管理する側（土地改良区等）のことを考えた農業水利施設を造っていきたい」と川野さんはいう。



国宝犬山城と犬山頭首工

そして、そのためにも「いろいろな技術者に施設の管理を経験して欲しい」と。

管理所職員の経験と判断の積み重ねが毎日の適正な取水管理を支え、毎日の地道な点検作業が施設の継続的な機能発揮を支えている。これにより、広大な農地へ「農業用水を送り続けること」ができるのだ。

更新事業が多い昨今、毎日当たり前のように「農業用水が送り続けられている」ことのすごさを、そしてそこに携わる人達のことを、改めてみんながもっと意識しなければいけないと思っている。

<参考>御囲堤とは、徳川家康の命により尾張国に築かれた木曾川左岸の堤防（現在の愛知県犬山市から弥富市までの約48km）であり、杣（ふきとも書く）とは、川から農業用水を取り入れるための口のこと。杣守とはその操作・管理を担当する人。

【東海農政局農村振興部設計課】